# 芥川の政治的意図と工夫の真の在処に出会える

## 芥川の中国女性の表象における差別性の浸透など、分析は犀利

**辻 吉祥**

▼芥川龍之介 中国題材作品と病
孔月 著
12・9・25刊 A5判二三二頁 本体四二〇〇円
学術出版会

かつて私が、『ハイデガー全集』の編纂作業にドイツ以外の研究者が容喙したり、優れた校訂の『ニーチェ全集』がイタリアに生まれたことを知って感心したのは、もう四半世紀も前のことのように思う。前者は本人がナチス関連の著作の削除指示をしている問題も含め、帝国的近代のテクストはつねに、あらかじめ国際的共有物なのである。

ひるがえって近代日本語文学の全集編纂は、広大な植民地支配、そこでの日本語強要の言語政策、体制としての日本型ファシズムの長い歴史があるにもかかわらず、なにゆえか外部からの眼を容認してこなかった。「日本(語)の文学は日本人がいちばんよくわかるはずだ」という根拠不明の確信、ドメスティックな即自的意識に閉ざされてきた。

だが、こうした根拠に乏しい自閉的な思い込みは、ようやくにして本格的な崩壊を迎えつつある。文学が、どの地域・時代にとっても、「本国人の、本国人による、本国人のための文学」などではなく、それ自体不透明で複層的な帝国のイデオロギーに浸された文化のテクストである以上、それは当然の帰結であろう。

本書はなにより、そうした既存の文学研究の歴史において、認識の転換を迫る重要な位置を占めた著作として今後確実に記録されることになると思われる。

著者はその問題意識を正当にも各所でこう述べている。「今までの芥川における〈病〉あるいは〈狂気〉の問題は、彼の遺伝や家庭環境といった個人的事情、および社会的因果性に起因した身体的症状などといった、芥川自身の経歴に還元されたり、あるいは近代的自我の問題や世紀末思潮という、時代と個人といった文化的事象として帰結されたりしてきた。だが、これでは「限界があり」、「むしろ作品の成立時の日中関係というさらに大きな政治的・社会的コンテクストと結び付けて考える必要がある」、と。

じっさい、この視点から行なわれる周到な分析は、日本人研究者のおよびもつかない植民地関係資料へのアプローチが豊富に試みられている。また、従来の研究に多い、読みの深さなる主観性に頼らず、何ゆえテクストがそのように解釈できるのか、同時代言説を、しかもそのうち――日本人がよくやるような言説一般をでなく――問題となる重要な文脈を複数取り出しながら、その拮抗関係を逐一つき合わせていく。その手法によって、どのような意味が析出できるのか、明確に論述されている。その手続きは実証的にも文学理論的にも実に確かであって、擬似フーコー風の昨今の手法の比ではない。

たとえば、『馬の脚』論では、従来のように解釈を恣意一般に縮減させるあり方から遠く、作中の〈馬の脚〉が、「蒙古の空気」を感じて「忽ち躍ったり跳ねたり」する点を時代背景と読者の政治的情報環境に照らした上で、当事者「忍野の内部に潜む国家の欲望の露呈」であるばかりでなく、「辛亥革命後の新政権の動揺を機に、満蒙地域へ進出していく帝国日本の欲望の制御不能の表象」だとし、「満鉄の利権、日本軍部の拡張策」に対する負の予感を批判的に問いかけた芥川の手法を的確に切開している。芥川自身が述べた『「馬の脚」は小説ではない。大人に読ませるお伽噺である』の意味を明晰にかつ政治的意味を取りこぼすことなく描き出したさまは見事というほかない。もちろん、その他、芥川の帝国主義批判の質、中国女性の表象における差別性の浸透などについても、分析は犀利(さい)である。読者は、この書によってはじめて、多くの芥川の政治的意図とその文学的工夫の真の在処に出会えることだろう。書にまとめられる以前からこの著者の初出を集めはじめた評者もそのひとりである。

著者は、謙慎によって論の対象を書名の通りに限定しているが、本書が論じた内容とその射程はきわめて大きいものである。近年最高の研究のひとつと言って間違いない。修辞を弄さず、最後にそう述べておきたいと思う。

(文学研究・批評/青山学院女子短大教員)

# 「曲軒」周五郎の一筋縄ではいかない人間性の内深くに分け入ったら

▼高橋
高橋
い欧文
ベート
年多く
してき
外の活
入し
し、
ている
ポグ
った
的な
本書
上に
の目
標は
に収め
外で
しと
あく
はな
ことだ